

2021年(R3年)

5月

No. 350

# ひとはろうしん



社会福祉法人 ひとは福祉会  
〒739-1203  
広島県安芸高田市向原町長田1857番地  
TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

(ホムパ -ジ アト リ) http://hitoha-fukushi.com (X-ル アト リ) honbu@hitoha-fukushi.com

いつの間にか桜は散り、山々は新緑の芽吹きが元気いっぱいです。  
 反面、私たちの社会は、コロナ禍がおさまるところか、第4波の兆しさえ  
 見せています。予防は当然しなければなりません。自らのよって立つ時点で  
 何をすべきか、何をしなければならないのかを見極めて行動したいものです。  
 先日、ひとは会(ひとはで活動している人たちの家族の会)のあるお母さんから  
 歌集をいただきました。わが子に対する愛情がひしひしと伝わり胸を打ち  
 ます。実は私も「五七を遊ぶ」と題して、短歌に親しんでいます。あろん  
 私のは、無手勝流のちゃらんぽらんですから短歌という叱られそうですが  
 おもいつくままに五七に並べてみるのも一興とばかりに日常をうたっています。

友来る 腹蔵なき 語らいは 時を忘れて 我を励ます

下痢止めて 久々にみゆ 硬き便 上~しやるぞと 意欲沸き立つ

あげるもの 何もなければ ただ一ツ 心をいやす 笑顔はどうぞ

選考: 編集委員  
(理事長 寺尾文尚)

あたらしい仲間か...  
 くらら  
 名前 上里千星  
 所属 就労センターあっぷ  
 食品製造  
 好きな食べ物  
 バナナ、ドーナツ、さかな

名前 向井遥人  
 所属 ひとは作業所  
 好きな食べ物  
 日本そば、うなぎ、井

令和2年度の後援会費の一部を、ひとは35周年記念号発行の費用に使わせていただき  
 ました。記念号にお寄せいただいた声と共に、会計報告を致します。

地域住民より: ひとはの歴史を改めて教えてもらった。  
 ほっとさん阿部さんより: 菅田さんが「ダウン症」と言った記事で、言っているの「であろうことか」  
 おおらかに載っていて大笑いした。  
 元職員より: 久しぶりに(ひとはの文章を)読むと、何となく温かい気持ちになった。  
 元職員より: ひとはは大きな組織になたが、思いは変わらないと感じた。

## 令和2年度 ひとは福祉会後援会会計報告 (令和2年4月1日~令和3年3月31日)

(単位:円)

収入の部		支出の部	
会費 402名(法人含む)	1,811,186	ひとは福祉会へ寄付	900,000
冊子収入	4,000	役員費(切手代、手数料)	582,744
利子	0	事業部工賃(いきがい)	35,000
前期繰越金	102,964	事業部工賃(ひとは寮)	35,000
		事業部工賃(あつぷ)	35,000
		印刷代他(35周年記念号含む)	236,500
		小計	1,824,244
		当期繰越金	93,906
合計	1,918,150	合計	1,918,150

担当: 岡川

あたらしく入った

スタッフ

ひとへの仲間たち

- ① 名前
- ② 所属
- ③ ほめてあげたい過去の自分

① 田植 京子

- ② 共同ホーム ひとへ
- ③ 三篠園の調理業務を定年まで働いてきたこと。

① 仲増 雅宏

- ② 共同ホーム ひとへ
- ③ 何があっても前向きにとらえる自分

① 西原 伊吹

- ② ひとへ工房 ささき亭
- ③ コロナ禍で誰にも会えない中、出産を頑張った自分

① 桂 秀昭

- ② ひとへ工房 ひとへ館
- ③ 広島市東区のパン屋さんでオーナーシェフの時のこと。テレビや雑誌に掲載され、毎日超忙しく製造販売していた自分。

① 佐々木 香代子

- ② くらむぼん
- ③ 途切れつつも日記を書き続けている自分。

① 升田 和彦

- ② くらむぼん
- ③ 小・中・高・大学で手当たり次第に本を乱読するような自分。

① 宮地 慎哉

- ② ひとへ作業所
- ③ 中学校の生徒会活動で、行事をみんなと一緒に盛り上げたポジティブな自分。

① 中村 京子

- ② 食事部
- ③ 高校時代、炎天下の中、ハンドボールを追いかけた自分

① 押川 真理

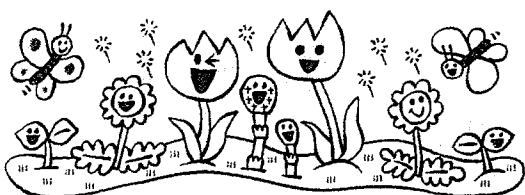
- ② ひとへ工房 ひとへ館
- ③ 神社巡りの趣味が高じてひろしま観光大使になった自分

① 松井 恭子

- ② 就労センターあ.ふ
- ③ 特に絵を習ったわけでもないのに「好き」だけでオリジナルキャラクターまで作らせた自分

① 竹田 佐代子

- ② くらむぼん
- ③ 決して器用ではないけれど、根気よく頑張っていた健気な自分。



語り継ぎたいこと

～おーい 聴こえますか 改訂版～

重廣さんと一緒にイベントに出掛け、帰りにちよつとしやれた喫茶店に寄りました。しかし、困ったことに、いつも注文するメニュー類や井物がありません。メニュー表を見ても、知らない名前の品物ばかりです。仕方ないので、その店の自慢で安いものを、と注文しました。出てきたものは、ナイフにフォークのピザパイです。重廣さんの渋い顔に「困ったなあ。」と思いながら、「重廣さん、食べてみんさい。うまいでえ。」とすすめると、ゆつくりと手を出し始めました。何口か食べると、重廣さんは「これが食べたいたい思いよつたんよう。」と、さもおいしそうにピザを口に運び続けます。

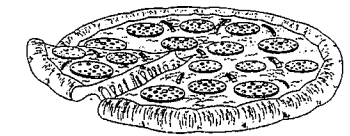
考えてみると、ひとへのきららと外食すると、いつも同じメニューを注文します。無論、好きということもあるかも知れませんが、実は、いろんな料理に触れる機会がほとんどないのではと思います。年代が高くなるにつけその傾向は高くなります。

自ら選択して、決定するには、何よりも経験を豊富にしなければなりません。知的なハンデイがあるために、経験は多ければ多いほどいいのですが、残念ながら反比例的に少なくなります。

地域での生活を豊かにするためにも、重廣さんにもっと多くの経験の場を踏んでもらいたいと思います。

食がた

思ひ



編集後記

4月号を発行しすぐのこと。重廣さんは「(語り継ぎたいことのコーナー) いいことが書いてあるじゃない。次は何が載るん？」と問われた。「これにこ来られて聞かせる方にはどんなことを伝えたいか、これと考て次を選びます。」と返す。「それは君次第！」と重廣さんらしい言葉が返ってきた。

(竹内 宏美)